

パレット物語

シ シ ウ 生

其 三

頃日萬事にまめな僕も、ツイ何時とはなしに主人の怠け性に感染して、此處二ヶ月も『みづゑ』に御無沙汰仕まつた。ドリヤ又パクリと大きな口を開いて、前條の續きを言上な仕らう。扱ても僕が始めて水彩畫講習所の門をくゞつたのは、主人の處に來た翌日早々であつた。その日僕は未だ新しい麻張の畫囊に入られて講習所に行つた、道中二十分程ガタ／＼揺られて、少し頭痛が仕始めた頃、僕は目的地に着いて畫囊から引ツ張り出された、そして汚い横長の机の上に置かれた早速大きな眼であたりを一度り見廻して、ハ、アこれが講習所だなと首肯いた。頭を打ちさうな天井、光線の具合の悪い硝子窓その硝子窓の方に近く、舊式な傷だらけな生徒机が五脚程ヅ、二列に並んで居る。そして室の三分の二は何も置いてない黒光りのする板の間で、處々無細工な四角な柱がニヨキ／＼立つてゐる、そして室の正面には、お粗末ながら一枚の「ボード」がかゝつて、傍に小形の「ストープ」が据えてある。その「ストープ」には、今しもパチ／＼と勢よく石炭が燃え盛つて、不景氣な教室に一大異彩を放つて居る。チラツと硝子越しに外の方を見ると、玄關から三四間を隔て、心細さうな黒塗りの門がある、そしてその左右には黒板扉がずらり——と云へば立派な様だが、蓋し見越しの松に粹な女文字の表札などを連想する程の價値あるものぢや

ない。要するに賢明なる吾輩は、この板扉によつて限定せられる内部が、平生は私立の幼稚園で、日曜になるとその日だけ水彩畫講習所に早變りする建物であると推定した。それにしてもこの町はどのあたりかとフト門の方を見ると、門の外が狭ひ露路ちぢのような横丁で、それが境で向ふに大きな白壁の建物がある。所々壁を抉り抜いて硝子窓がある所を見る見と土藏でもない様だ、ハテナとよく見ている内に、それが學校であると分明了。あとで主人共の話してゐるのを聞いてると、何でも私立日本大學ださうな、さりとてあの壁の剥げた窓の損れた具合、恐ろしい汚い大學校もあるものだと感じた。日本大學があるなら三崎町だ道理で近所にろくな家は一軒もない。序手に言つて置くがこゝに話の順序を明瞭ならしめる爲めに、講習所がこの町にあつた時分を稱して三崎町時代と稱へて置く。マア四邊の光景はザツと以上の通りぢや。主人は未だ「ストープ」の傍にかぢり付いて居るから、この隙に今一度室内の觀察を遣らう。先程話した窓ぎはの十程の机には、僅かに八九人の人が陣取て各々熱心に筆を走らせて居る、机は二人用のものだから、仲には二人陸さうに並んで遣つて居る人もある。驚ろいたことにはこれ等の生徒の半數は婦人であつた。成る程都會の女は違つたものだと感心しながらよく見ておいた。十五六のマガレットのお嬢さんが二人、十八九の庇髮の一人、モ一人は二十四五か七八か顔に頗る或る特徴を持つた人なので一寸判断に苦しんだ。男の方とは見ると、十四五の可愛らしい少年が一人、中學生が二人

それからどちらも二十四五位な青年で、一人は顔の四角な官吏らしいのと、一人は顔の長い眼のクリ／＼した書生とも何ともつかぬ様な人、それに僕の主人を加へて丁度六人、それ丈が今でも記憶に残つて居る其當時の人々である。アそれからモ一人ある／＼それは今「ストーブ」の傍で、主人と頻りに小聲で話をして居る人である、年のころ凡そ三十七八、或は四十位にも見える、七子の紋付羽織に折目正しい袴をはいた、背の無闇に高い紳士、髯がないので風采は平凡に見えるが主人が話をする度ペコ／＼頭を下げて居る處を見ると、あれが有名な大下先生に相違ない。——と乍蔭大に敬意を拂つて見て居ると、聴てその紳士は火の傍をはなれて、ノソリ／＼と生徒の方へ歩を移されるそして一人一人丁寧な検閲が始まつた。扱ては愈々先生であつたわいと意識が明確になる。主人もやうやく「ストーブ」から去つて、空席を占めて畫板を取り出した、畫板には「ワットマン」の十六切が見すばらしく板の中央に水貼がしてある、シシウ君は今日はこれを書き給へと、先生が一枚の手本を机上におかれる。見ると外國の繪で海岸に船が一艘置いてあるセピヤ一色刷の臨繪である。主人はハイ／＼と嬉しさうにこれを受取つて輪廓を取る、それが一通り済むと主人は又手を焙りに行つた、そして又先生と話をして居る、どんな話かと欠伸しながら聞くと、先生の聲で「美術家にはう／＼かりなるものではないよ、エカキなど一寸考えるとこんな面白い楽しい職業はない様だが、その實どうして仲々苦しいものだ、マア家にウンと財産でもあつて、生活

の苦痛もなけりや責任もない様な人であつたら畫家を志す資格があらう、貪乏人が畫家にならうと志すなら、マア乞食になる覺悟で始めるがい／＼と云ふやうな御話しが聞えた。主人はと見ると「困つたナア」と云ふやうな顔をして謹聽して居る。扱一體外の人ばどんなものを畫いてるのかと見ると、皆セピヤの手本ばかりで、仲には鉛筆畫を遣つてるのもある、手本を睨め／＼鼻の頭に汗をかきながら遣つて居るが、未だ寫生をして居る人は一人もない。サア愈々主人の着色が始まつた僕も大分忙しくなつた、處が何しろ一色畫なので僕の嫌いな／＼セピヤばかり之れも佛國製の下等もの「チューブ」からビリ／＼と絞り出しては、僕の身體中處嫌はずナスリ付ける、何だか變な臭までして不快極りない。厭な主人を持つたものだと思つたが仕方がないこれも前世の因縁だらうと斷念めて、觀念の眼を閉ぢながら、詮方なく主人の自在に任せて居た。その内に中食も濟んで午後又始める、高が知れた「ワットマン」十六切の一色畫だが、主人は中々弱つてゐるらしい外の人も皆一生懸命で勉強して居る。この日午後には又一人洋服を着た先生が來られた、眞野先生と云ふ大下先生のお友達ださうで、花を畫くのが大變御好きだと云ふことだ、この先生の外に更に又一人若い人が來たその人は氣の利いた桐の「スケッチ箱」を肩から懸けて意氣揚々と入つて來たそして向ふの窓側に行つて梅の花の寫生を始めた。その頃は未だ水彩畫の「スケッチ箱」など大分珍しかつた、今でこそ小學校の生徒までブラ下けて歩く様になつたが、その時分は油繪の

こそ有れ水彩の「スケッチ箱」は少なかつた。皆机からふり向いてはデロ／＼その箱を見て居た。やがてその若い人は板の間の上に具合よく梅の花を案配して寫生を始めた。この恐るべき新來の生徒が加はつてから、一室の熱心は少し破れた。皆時々筆を止めてはその方を見て居る、主人なんか時々恐る／＼さし足抜き足でその「スケッチ箱」の傍に依つては感心して眺め入つて居る、僕も時々見やうと勉めたが遂に見ることが出来なかつた。主人はその寫生を見て自分の席に歸つて來る度に、隣りの人にア、僕等もせめてあの位畫ける様になりたいナアとしてみみ小聲で話して居た、主人が一生の理想とする繪がどんなものであつたかその日の寫生はとう／＼見ることが出来なかつたがその後その人の畫いた靜物畫を見たことがある、今から思へば随分おかしなものであつたがそれを見た當時は僕も大にうまいと思つた。何しろその日は全くその若人の獨り舞臺であつた皆畏敬の念を以て環視してゐるので先生グツと反身になつて大に健筆を振つて居た。後で聞くとこの人はYと云ふ極く人のいゝ勤め人で暫くしてから主人なども大に懇意になつたやうであつた兎も角主人も夕方まで突ついて居たが先生が廻つて來て、今日はもうお仕まひなさいア、シシウ君のは未だ見なかつたれウン段々調子がわかつて來ましたね、只この雲の調子が少し重すぎたねエこれぢや雲が空から抜け出して鼻の先きに來た様に見える、雲は稍／＼ともすると重くなり過ぎるものだから、注意してお畫きなさい。とか何とか言はれて筆をおさめた。そして丁寧僕

の身體を洗つてくれたのでホツと一息ついた、ア、今日のセピヤ畫には僕の雪を欺く御肌が少からず尊嚴を害された、コレで先づ今日のスタデーは終つた家に歸つてから一人つく／＼考へて見た之れから後何時までセピヤ攻めに逢ふのだらうと思ふと心細くなつて何だかシク／＼泣けて來た。主人にしてもが一刻も早くホントの水彩畫に移りたい様子であるが、未だその資格がないのだから仕方がない。だが其後一ヶ月程経てから主人もいよ／＼ホントの水彩畫を許される時が來た。或日のこと先生から今日はこれをお畫きなさい、大分セピヤの方もうまくなつた様だから——と云つて一枚の水彩畫手本を渡された時の主人の顔は天にも昇る様な嬉しさうな希望の光りが眼一ぱひに溢れて居た。お蔭様で僕もヤツと安心して手本を見ると紙の中央に松の木一本丈畫いてある繪であつた。何しろ主人大得意となつて息をもつがず一生懸命に遣つてゐるが、始めての着色畫だから頗る弱つて居るらしい。血眼になつて僕の身體中安繪具を混ぜ散らして居る、セピヤでなくてもガンボーヂなどは何とも云へぬ厭な臭氣がする、併し色の感じがセピヤ程不愉快でなく極く明快な色だから未だガンボーヂの方は我慢が出来る。主人時々舌打ちをしては何で難^{むづか}しいんだらうと呟きながら遣つて居る、何でもこの日主人と一しよに着色畫を許されたのは隣りの席に居た蠻カラの中學生でこの二人が先づ着色畫の先頭第一の恩命に接したらしい。あとの連中は未だコツ／＼セピヤ畫を畫いて居た。兎角何事でも草創の際は振はぬものに定つてゐる始めから

花々しいものは終ひにはるくな事は無いものだ、講習所も此時代は前の如き始末で設備は不完全で生徒も少なく生徒は皆模寫黨ばかりの哀れな連中只「スケッチ箱」所有者のY君が獨り嶄然頭角を抜いて居た位のものである。其頃は大下先生だつてどんなにか心細かつたことに相違ない。さりながら此僅少な講習生は今の堂々たる水彩畫研究所の原始的記念物として、多大の價値を有するものであると思ふ。故に僕は研究所の變遷を説くに當つて、それ等石器時代の人々を一應天下の同志に紹介して置きたい。誰か世界の美術史を語るに當つて、先づ埃及のオペクスクや三角塔を述べぬものがあらう況んやそれ等の講習生は、數こそ少なけれ、技術こそ拙けれ中にはその閑歴の上に少なからざる面白い話柄を有する人が多かつたに於ておやだ。僕は次號に於て大にそれ等の趣味ある閑歴をすつば抜くことにしやうと云つて決して人身攻撃など、卑劣なことをする僕ぢやない事を斷つておく。



西行の筆捨山など名所がある。景色の佳いのに閉口して迎ても手が出せないといふので筆を捨てたことであらう。餘り諦めが早過るやうだ。第一其筆が勿體ない。諸國を遍歴して少し佳い景色の處へ來ると筆を捨てゝゐては筆の數も多く入ることであらう。

昨年九月頃に亡くなつた英國の畫家ホルマントといふ人は葬

式の節、棺を飾るに此人が生前使つてゐた畫筆を山のやうに積んださうだ。好い思ひ付きである。日本では天神様へ行くと筆が澤山上つてゐるが見て誠に氣持がよい。尤も臺灣のやうに蟲が食ふ處では飾つて置く譯にもゆくまい。

筆の極く使ひよいのは、新しいものではなく稍や古くなつて少し先の切れて來た時だ。これは自然に先が切れて來たから良いので態と切つても妙でない。それゆへ書家の方は知らないが、畫家は古い筆を大切がらる中々捨てるどころではない。

筆が古くなると其色の特質が出て來る。之が其主人の特質に似るのだから面白い。それ故自分の筆を人に貸すのも厭であるが人の筆を借りて使ふのも眞平だ。自分が知らぬ間に一度でも人が使つた筆は直ぐ手加減で知れるのが妙である。

之は心理上さうであらう。畫家が筆を手にすれば其毛の先き迄血が通はなければウソだ。手は手筆は筆と別々でゐては佳いものが出來やう筈がない。

斯うなつて來ると、能書は筆を選ばずなど云ふことは出鱈目だ。成るべく良いのを選むだ方が書きよいだけでも得である。

第一之が道に忠なる所以であらう。自分と一心同體である筆が好加減の間に合はせものと來ては辛棒が出來ない。何本でも捨てる西行に劣けることではない。(寫生趣味)

■畿内見物、春泥集、邦助畫集其他の新刊紹介は紙面の都合上次號へいづる